



## 途上国の現場から

大西洋をはさんで親子でJICAボランティア

函館市出身の泉さんは、娘がモロッコで音楽隊員(青年海外協力隊)、父がパナマで漁業(シニア海外ボランティア事業)と親子でJICAボランティア事業に参加しています。これまで兄弟・姉妹で青年海外協力隊に参加という事例は数多くありましたが、親子で、しかも同時期にJICAボランティアに参加するケースは北海道からは初めてのとのこと。今回の途上国の現場からでは、この泉親子にモロッコ、パナマでの活動の様子を報告していただきました。

### モロッコの娘より

私が、モロッコに来て早1年が過ぎました。初めての海外生活。言葉も満足に話せず、悪戦苦闘の毎日でした。しかし、いつも笑顔で迎えてくれる同僚や生徒たちに励まされ、少しずつ活動にも慣れてきました。

私の職場は「コンセルバトワール」という音楽の基礎や様々な楽器を学ぶことができる音楽学校です。そこで、私はピアノと合唱の授業を担当しております。ピアノは、約30人の生徒に個人指導をしています。対象は7歳から25歳と幅広く、レベルも様々です。ほとんどの家庭にはピアノがありません。その為、指導法にも工夫が求められ、苦勞することもあります。先生、できたよ」と笑う生徒の笑顔を見るのはとても嬉しいことです。

合唱は、私が学校側に提案し、開設した授業です。なぜなら、楽器がなくても体ひとつで音楽を楽しむことができる授業だからです。最初はバラバラだった声も、少しずつきれいな2部合唱ができるようになってきました。日本語で歌う「ふるさと」もレパートリーの一つです。きれいなハーモニーができると、みんなが拍手し、和やかな雰囲気の中で授業が行われています。

今回、この協力隊員への道を示唆してくれたのは父です。活動が軌道に乗ってきた時に父がくれたメールには「すべてが順調な時こそ大きな失敗を招く」という戒めの言葉がありました。厳しい中にも温かい思いやりが感じられる言葉でした。先日、1年ぶりに任国外旅行で両親と再会しました。元気な父の姿に充実した毎日を送っている様子を感じられ、安心しました。また、任地の人々と生活を共にし、体当たりで仕事をしている父の話を聞くこともでき、今後のボランティア活動をする上で、参考になりました。海の向こうで活動している父に願うことは、とにかく「健康であること」です。任期を終えて、父とお互いの活動の話をお酒を飲み交わしながら話すことが、何よりの楽しみです。

(平成17年度1次隊 音楽 泉麻衣子)

### パナマの父より

私は現在、パナマで漁具漁法の技術指導中です。パナマは漁業がそれ程盛んな国ではありません、北海道と同じぐらいの面積で人口は300万余りの小さい国です。主な産業である畜産は盛んというよりは国土の大半を牧場(私有)が占め、工業は殆どなく、運河の通航費及び世界中で航行しているパナマ籍の船舶から徴収する税金が国の主な収入です。漁業は耕作地のない僻地の人達の生活を支える唯一の収入をもたらす手段だったでしょう。私の技術指導の対象者は零細漁民です。

使用漁船はボートに船外機を付けた小型船で、釣りを主体とした日帰り漁が殆どです、この様な国では、どのような漁法が効果をもたらすかは全く判りません。伝統的な漁法には必然性があるので、現地の漁法を見ながら現地に適した漁具・漁法を考えています。漁獲量の確保のみに走る資源の枯渇につながりますが、この度パナマで実施したのはパヤオ(浮き漁礁)を沿岸に設置して回遊魚を集めることです。回遊魚はパナマでは余り人気はありませんが、太平洋に面しているため資源量は問題ありません。初めの計画どおり7月までに25基設置しました。魚もキメジ(キワダマグロの仔)、シラ等が集り始めました。これからは、必ず生じるであろう問題の対策を漁民に指導していく予定です。

先日モロッコに協力隊員として赴任している娘の勤務先メクスを女房と訪問してきました。寒暖の差が激しい国土で暑さ慣れてきている筈の私も乾燥には参りました。勤務先で校長や先生方にお会いしましたが、皆さんが娘を高く評価してくれているのが、言葉は判らないのですが態度で察せられ女房共々安心しました。娘の任期も7カ月余りとか、身体に気を付けて任期を全うすれば、一回り大きくなって帰ってくることでしょう。

(シニア海外ボランティア 水産 泉茂)



ピアノの指導を行う泉(娘)隊員



小型船上で指導を行う泉(父)ボランティア

### 10万人の前で熱唱し、王様の握手が許された日本人

8月1日付けのJICAメールマガジンで札幌出身の青年海外協力隊員、椎谷さんが紹介されましたので「であい」でも紹介させていただきます。また、JICAメールマガジンは月2回発行されており、<http://www.jica.go.jp/mail/top.htm>から登録していただけます。多くの方々に利用していただければ幸いです。

6月4日と5日、東アフリカのウガンダで10万人規模のコンサート「Ekitoobero Kujaagaana<エチトーベロ クジャガーナ>」(現地のガンダ語で、いろいろな大きなお祭り、という意味です)が開催され、青年海外協力隊の椎谷健一さんが熱唱しました。ここで披露した曲は、椎谷さん自身が現地のガンダ語で作詞、作曲をしました。この曲はすでにラジオで頻りに流れています。

コンサートは4日朝7時から翌朝まで23時間ぶっ通しで行われ、東アフリカの有名歌手が数多く参加するなか、椎谷さんたちは最後のいわゆるトリを飾りました。「舞台上で登場する前までは、バックステージできらびやかな衣装をまとった貴族があるプロの歌手たちの間にいて、少し緊張していました。けれど本番、自分の名前が呼ばれ、約3メートルの高さの舞台上に駆け上がると、スタジアム内にギッシリと埋め尽くされた大観衆の響き渡る歓声に包まれて、心地よい高揚感は一瞬に達しました。歌の前後に司会者から質問され、自分のガンダ語のトークがみんなにウケてリラックスできたのがよかったのか、そのなかで歌い踊るのは今までになく爽快感でした」(椎谷さん)

そして、コンサートの最後に、会場に来ていたブガンダ王国(ウガンダ国内にはいくつかの王国がありますが、そのうちブガンダ王国は首都カンパラを中心とした最大の王国)の王様と、王家の一員しか許されていない握手を、王国の日本大使として椎谷さんは許されました。

このような活動をされた椎谷さんを、音楽関連の活動をしている隊員のように思う方もいるかもしれませんが、実は理数科教師の隊員です。現地では、カンパラにある小学校教員養成校で小学校教師になることを夢見る若者たちに理数科とコンピュータの指導をしています。

「理数科教師としての活動以外にも、趣味的な要素の活動もあると思っていましたが、予想以上の展開でした」と椎谷さん。

実は椎谷さんは音楽活動の経験がまったくなく、ギターもウガンダに来て始めたといえます。

「歌や踊りを通しての活動では、国や人種を飛び越えて、現地の人々と気持ちごとく心が通じるような感覚を味わうことができますね」。

現地で多くの人たちから親しまれた椎谷さんですが、この9月に帰国します。「君が帰国しても、ウガンダの人たちは君のことを忘れないよ」最近、椎谷さんが言われて最もうれしかったのが、地元の人にかけられたこの言葉だったそうです。

椎谷さんは帰国後、ウガンダでの経験を生かし、JICA国際協力出前講座で日本の学校を巡回して子どもたちと関わりをもちながら、いつか再びアフリカの地に足を運びたいと考えています。

大観衆の前で歌う椎谷隊員

